

15. にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。

説教

これは、イエスさまが山の上で弟子たちに教えた山上の説教の一節です。イエスさまはひととおり教えてから、その締めくくりに、教えたことを行うよう、いくつかの話をなさいます。その最初が「狭い門から入りなさい」でした(13-14)。そして、それに続く話として「にせ預言者」に警戒するよう教えるのです。

「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」(15) 「預言者」というのは「神のことばを語る者」のことです。「ノストラダムスの大予言」の「予言」は未来を予告する人のことですが、これに対して、「預言」とは文字通り神のことばを預かってそれを人々に語る人のことです。その「にせ預言者」ということですから、一見すると「預言者」風なのですが、実際には「預言者」ではありません。つまり、神のことばを語っているように見えるのだけれども、しかし、実は語っているのは神のことばではないのです。「にせ預言者」と訳されているギリシャ語は、「欺す預言者」あるいは「嘘をつく預言者」を意味します。神のことばを聞いてそれを人々に教えるのが本当の「預言者」なのですが、「にせ預言者」は「嘘をついて欺す」のです。本当は神のことばを聞いてはいないのに、あたかも本当に聞いたふりをして、神のことばではない「にせ預言」を人々に教えます。そして、「神のことばではないにせ預言」とは何かと言えば、要するに自分の言葉です。それは、自分の考えだったり、うまい処世術だったり、儲け話だったり、人を喜ばせ安心させる立派な話だったりするのですが、神のことばではありません。人間のことばです。「にせ預言者」が考え出し創作した「にせ預言」です。それは「嘘」であり「欺しごと」です。

旧約聖書には「にせ預言者」が何人か登場します。例えば、エレミヤの時代にはハナヌヤという「にせ預言者」がいました。この人は、王の気に入ることばかりを「預言？」する、宮廷の御用宗教家のような人です。当時、超大国バビロンと戦うか降伏するかが国家の存亡に関わる最も大きな問題でした。エレミヤは、神から命じられて、警告のための視覚教材として木の枷を首にかけながら、このままではユダが罪の故にバビロンに滅ぼされて70年間捕囚生活を味わうことになる、バビロンに降伏して生きよ、と預言していました。これは極めて厳しい預言です。敵国に全面降伏しろと言うのですから、王をはじめ為政者にとっては、聞きたくない、耳の痛い話です。これに対し、「にせ預言者」ハナヌヤは、王たちの機嫌を取るため彼らに耳障りのいい預言をします。すなわち、神がバビロンを2年以内にやっつけてくれるので大丈夫だ、安心しろ、という預言です。エレミヤが首にかけていた木の枷を取ってそれを砕くパフォーマンスまで披露しながら、「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。わたしは、バビロンの王のくびきを打ち砕く」と派手に預言したのでした(エリヤ28:2,3,10)。しかし、これは全くの「にせ預言」です。結局、エレミヤの預言は採用されず、ハナヌヤの預言が王たちに受け入れられます。それで、最後までバビロンに降伏せず対抗するのですが、その結果、ユダはバビロンに滅ぼされ、最後の王ゼデキヤは、目の前で自分の子どもたちを虐殺され、その後両目をえぐり取られます。それから、青銅の足枷につながれてバビロンへ捕囚に連れて行かれます(Ⅱ列王25章)。一方、嘘を「預言」した当のハナヌヤ自身は、エレミヤの予告通り、「にせ預言」をした2ヶ月後に神に打たれて死んでしまいます(エリヤ28:17)。

つまり、人を欺く嘘偽りの「にせ預言」は、結局、誰も救わなかったのです。それは神のことばではないからで

す。「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる」と言うものの、それは神から出たものではありません。神ご自身が語ったものではないのです。それでは誰が語ったのでしょうか。神ではなく、人間が語りました。人間が勝手に語りました。人間が、「にせ預言者」であるハナヌヤ自身が、神から聞いたわけでもないのに、神から教えられたわけでもなく、自分から勝手に語りました。どうしてでしょうか。何のためにでしょうか。それは自分のためです。神と人のためではなく、自分の利益のためです。神に喜ばれるためではなく、人を喜ばすためです。ハナヌヤならば、王たちを喜ばすためです。王に気に入られるためです。王に気に入られてどうするのでしょうか。王に気に入られて「預言者」として重用され、宮廷のお抱え御用預言者となり、世的に言えば、時流に乗って時の人となり、出世して、人々から尊敬され、そうして結局は金を儲けます。つまり「にせ預言」の目的は、要するに金儲けのためなのです。

神学校で学んでいる時、アメリカ人の教授から、「牧師になったら、金と異性と功名心、この三つに気をつけなさい」と教えられました。これらを捨てて神に献身し、神学校に行って牧師になったはずなのですが、いつしか古い自分がむくむくとゾンビのように生き返ってきて、いつしか「金と異性と功名心」まみれの宗教屋に成り下がってしまう危険性があることを警告されたのだと思います。キリスト教人口約3割というキリスト教勢力の巨大な韓国と違って、日本ではキリスト教会は超マイナーです。ですから「功名心」など関係ないようにも思えますが、それでも、マイナーならマイナーなりに、これ以上世間から見捨てられないようにといったコンプレックスが、つついっ少しでも世間受けして時流に乗りたいという思いにさせます。妖しい占い師のように人を欺して大儲けといかなくても、せめて生活できるほどになりたいとの切実な思いが、厳しい預言を妨げるという危険性もあるでしょう。例えば、同盟教団で最も古い高山教会（1895年創立）の戦時下の週報を見ると、日中戦争の始まる1938年の初週祈禱会の際には「基督教会は嫌われているから善行伝道に励み、軍事慰問献金に励もう。防空演習に励もう。海事記念日にも参加しよう。」と呼びかけていますが、敗戦間近の1945年頃には礼拝出席者は2-3名となり、そのうち2人は日本人ではなく韓国の婦人だったそうです。

イエスさまは言われます。「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」イエスさまは「にせ預言者」の本質が「貪欲な狼」であると解説しました。彼らは自分のことしか考えません。自分の安心、自分の安定、自分の利益…、彼らの関心は自分のことだけです。「利得を貪り」ます。

「貪欲」です。自分のことしか考えていません。どうしたらもっと儲かるか、どうしたらもっと人受けするか、どうしたら自分の立場がより向上するのか、出世するのかと、自分、自分、いつも自分です。自分しかありません。

どうしてでしょうか。神を知らないからです。神の愛を知りません。神の恵みを知りません。神のみこころを知らないのです。だから、その神の愛に応えようとか、何が本当に神と人のためになるかとか、真剣に考えません。これが「にせ預言者」の正体です。「にせ預言者」の本質、「にせ預言者」の実態です。「にせ預言者」も反論するかも知れません。自分だって神と人のことを考えていないわけではない、自分なりに考えている、国家が存亡の危機に立たされている一大事に、不安な人々の心を癒す「平安」を「預言」して何が悪いのか、自分なりに考え、自分なりに知恵を絞り、自分なりに配慮し、考えて語っていると。でも、どんなに賢く知恵を絞っても、それはあくまで人間の言葉に過ぎません。そして、人の言葉は人を救うことはできません。それは真の平和をもたらすものではなく、まやかしの気休めです。

人を罪と滅びから救うのは神のことばだけです。神のことばには力があり命があります。「にせ預言」はあくまで「にせ預言」です。「わら」は「わら」です。実のある「麦」と違って、中身が無いので実を結びません。「わら」をどんなに大量に蒔いても実を結ばないのです(エミヤ23:28)。どんなによく学んでも、熱心に信じて、「にせ預言」は私たちを救うものではありません。むしろ滅びをもたらします。異端の教えは地獄に直結します。既存

の教会でも、戦時下の日本の教会の名だたる牧師らのように偶像崇拜を煽動して、「羊のなり」をした「第三の獣」である「にせ預言者」と化すこともあるのです。お互い、気をつけましょう。